

すがわらでんじゅてならいかのみ

菅原伝授手習鑑

〔解説〕

延享三年（一七四六）八月、大坂竹本座初演。竹田出雲・三好松洛・並木千柳らによる合作。全五段。近松門左衛門の「天神記」を基本とし、当時のニュースである三つ子の誕生などを取り入れ書き下ろした物。二段目に菅丞相と苅屋姫の別れ、三段目に白太夫と桜丸の別れ、四段目に松王丸と小太郎の別れ、と、それぞれの段の切に親子の別れを描いており、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」と共に、時代物の三大名作として親しまれています。

〔あらすじ〕

【初段】延喜帝の御代、左大臣藤原時平、右大臣菅原道真（菅丞相）が政治の中心となっていたが、反逆心のある時平は、菅丞相を邪魔に思っていた。

帝は病のため、渤海国からの使者に対し、弟君の齋世親王が名代となる。

菅丞相の佐太村（現在の大阪府守口市内）の領地は、白太夫（四郎九郎）という百姓が預かっており、白太夫には、梅王丸・松王丸・桜丸という三つ子がいたが、それぞれ梅王丸は菅丞相、松王丸は藤原時平、桜丸は齋世親王の舎人（皇族などにつかえる下級役人）となっていた。

齋世親王は、天皇の病氣平癒祈願の参拝の折、桜丸と女房八重の手引きで、苅屋姫（菅丞相の養女）と密会をするが、時平の家来が詮議に来たため、親王と姫は、行方をくらまし、その後を桜丸が追う。

一方、名筆の誉れ高い菅丞相は、以前、不義の科で勘当していた武部源藏を呼びだして、菅家の筆法を伝授する。

時平は、齋世親王と苺屋姫の行方が知れないのは、菅丞相が親王を帝位につけ、娘を后にして、自分が実権を握ろうとしている策略であると、讒言(他人を陥れるため有りもしないことを上の人間に言うこと)する。そのため、丞相は閉門、流罪となる。危険を感じた舍人梅丸は、丞相の実子菅秀才を源藏夫婦に預ける。

【二段目】桜丸は齋世親王と苺屋姫に追いつき、姫の実家の土師の里へ向かう途中で、菅丞相が流罪になった事を知り、一目会おうと行列の後を追う。安井の岸で汐待ちをしている一行に桜丸が追いつき、対面を願うが、菅丞相の罪が重くなるとして許されない。苺屋姫は、姉、立田の前に伴われて実母覚寿のいる道明寺へ向かうが、役人判官代輝国の計らいで丞相一行も土師へと向かうことになる。また、齋世親王と桜丸は都へと別れていく。土師の里では、覚寿が、丞相が罪に問われたのは苺屋姫のせいだとして、姫を杖で折檻する。それを菅丞相の声に止められるが、不審に思った覚寿が襖を開けると、そこには伯母への形見として丞相自らが彫った木像があるばかりであった。

立田の前の夫、宿弥太郎とその父土師兵衛は、時平に頼まれ、偽の迎えになり丞相を連れ出そうと計画していたが、それを知った立田の前を殺す。偽の迎えが来て丞相を連れて行ったあと、覚寿は立田の前が殺されたことを知って宿弥太郎を刺す。そこへ、輝国ら本当の迎えが来るのだが、実は、偽の迎えに連れて行かれたのは丞相の木像で、人々は奇跡に驚く。そして、全ての悪事が露呈し土師兵衛も殺される。丞相は覚寿や苺屋姫と別れて、名残を惜しみつつ太宰府へと旅立つのであった。

【三段目】梅王丸と桜丸は吉田神社で出会い、通りかかった時平を襲おうとして、舎人である松王丸と争うが、父の賀の祝を済ませてからと、その場は別れる。

祝の日、三兄弟の嫁達、春・千代・八重が集まり仕度をしている。四郎九郎は七十の祝に白太夫と名を改める。白太夫が八重を連れて氏神参りに行っている間に、梅王丸と松王丸がやってきて喧嘩を始め、白太夫が大切にしている菅丞相の御愛樹、梅、松、桜のうち、桜の枝を折ってしまうが、帰ってきた白太夫はそれを見ながら何も言わない。松王丸、梅王丸夫婦が帰った後、納戸に忍んでいた桜丸が現れ、丞相流罪の責任をとって切腹する。八重も後を追おうとするが、物陰に潜んでいた梅王丸夫婦に止められる。白太夫は八重を梅王丸夫婦に託して筑紫へと向かうのであった。

【四段目】太宰府の菅丞相は時平の反逆を知り激怒し、雷神となって都へ飛ぶ。丞相の御台所は北嵯峨に隠れ住み、春と八重が仕えている。春の留守中に時平の家来が襲来し、八重は討ち死に、御台所は山伏に連れ去られる。一方、武部源藏夫婦は、京のはずれで寺子屋をいとなみ、若君菅秀才を我が子として匿っていたが、これを時平に知られてしまい、首を討てと命じられる。源藏は思いあまって、その日寺入りしたばかりの子供、小太郎の首を切ってしまう。見分役である松王丸は、その首を秀才の首と認めて帰って行く。そこへ、子供の母親がもどる。実は、小太郎は松王丸夫婦の子供で、身替わりを覚悟で連れてきたという。松王丸も現れ、心ならずも時平に従ってきたが、これでやっと菅丞相の恩に報いる事が出来たと語るのであった。北嵯峨で御台所を救い出したのも、実は松王丸で、若君と親子の対面をする。「寺子屋の段」

天拝山の段

伴ひ。安楽寺に入給へば、『それぞ』としるき

梅花の、袖に留木の心地せり

「こりや不思議、こりや希代ぢや。申し丞相様、

道すがら御住持の夢咄、へ、何をやらるゝやら、

そんな事がよう有ふかと誠しない事疑ふており

ました、ガ来て見てびつくり。この木の技ぶり花

の匂ひ、佐太のお下屋敷に預つておりました、

ヲ、それぢやくその梅でござりまする」

と、床几の傍にちよつ蹲ひ、口も心もありのまゝ

見へた通りの律義者。花の眺めに一入の、興を催

し、をはする所に

「ソリヤ喧嘩よアリヤ抜いた、切合ふてソリヤ来

るは、寺内へ入れな、門打て」

と言ふ間あらせず踏込み、打ち合ふ戦ふ侍二人寺僧は驚き、白太夫、御座を囲ふて

「ア、コレ、見れば双方旅装束、喧嘩は振り

物とあつてから、こゝで仕舞ひは付けさせぬ。出

やれ、出やれ」

と言ふをも、聞かず切合ふ一人は我が子の梅王

「コリヤマアそちは何として、ハアひあいな切ら

れな」

と氣を揉み焦る親心、声の助太刀相手の刀、梅王

に打落され、逃ぐるをすかさず飛びかゝり、片手

掴みにもんどり打たせ、膝に固めし健氣の振舞ひ

「ヤレ、出かした手柄、手柄、やれ手柄、手柄

はしたが喧嘩の次第、次にはが下つた様子、都の

事を案じてござんます。幸ひ是に丞相様、様子

一々申し上げい」

「ハツ、ハ、ア、恐れながら梅王が念願達し、変らせ給はぬ御尊体、見奉るは生涯の本望。都に御座あるお二人様、世を忍ぶ御身なれば、一つ所に置きまされず、若君様は武部源蔵に預け置き、私が妻桜丸が女房、八重と春とは御台様の御介抱。御身の上は差置かれ『配所の様子見て参れ』と、仰せに幸ひ出船のひ、天運に叶ひ日和まん、千里一はね日数もこめず、夜前この地へ筑紫船、乗合ひの中に時平が家来驚塚平馬。この梅王を見知らぬ馬鹿者、ふぶくりかけて様子を問へば、『菅丞相を殺しに来た』とが口から最期を急ぐ。寺にござるをよう知つて直ぐに仕掛ける不敵者、梅王が御土産」

と、早縄掛けてぐつと締め上げ、縁柱に猿繫ぎ、心地よくこそ見へにける。丞相御悦喜浅からず

「恋しき都の様子を知らず、忠義の花は有情の梅王。示現によつて飛来たる花は非情のこの梅の木、有情非情も隔てなく菅丞相を慕ひ来る、梅に褒美」の御言の葉

『梅は飛び桜は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん』。つれなかるらん松王は時平が舍人、枯れし桜は宮の舍人、梅王はわが舍人、花の榮は安楽寺」

その名も高き飛び梅の、不思議は今に隠れなし
「ヤイ梅王、ありがたい今の御歌。この梅にへその方をお誉め遊ばし、『桜は枯るゝ世の中』とは死んだ倅を御悔み。『つれなかるらん』とある松王めは、時平に追従しておるな」

「ホ、親人の推量違はず、兄弟といふも穢らはしい。畜生めは差置いてさす敵はこの驚塚。サア時

平がみ白状せい、いやと言はば刀の引導、どうぢや〜」

と立かゝる

「ア、コレ聊爾あるな。主従の義を立て抜き、命に替へて言はぬは古風、言はして置いて殺すも古風、新らしう助かる様に残らず申す。時平殿は王位の望み、邪魔になる菅丞相首取つて立帰れ、軍陣の血祭して大望の旗を挙げ、天皇、親王、院の御所、片端仕舞ふて天下を一呑み。身共も公家になる楽しみ、空悦びの裏が来て、恥を曝す縛り縄コレ。早ふ解いて下さりませ」

と時平が謀叛一々残らず、聞こし召されし菅丞相、柔和の形相忽ち変り、御眼尻に血を注ぎ、眉毛逆立ち、御憤り、都の方を睨み付け、物狂はしく立ち給へり。白太夫びつくりし

「知れてある時平が工み、今聞いたか何ぞの様に、ついぞ覚へぬ怖いお顔、こゝから睨ましやましても都へは届きませぬ。御持病のが発れば、チエ、悲しうござります」

と老のくどく物案じ

「やおれ梅王、白太夫。時平の大臣が謀叛の企て、聞き捨てられぬ御大事、赦免なければ帰洛も叶はず、王位を望む朝敵と、しろし召されぬ玉体危し。臣が忠義徒らに此所に朽ち果つるは虚名蒙るとも、死したる後は憚りなし。靈魂帝都に立帰り帝を守護し奉らん。天に誓ひの我が願ひ、は目の前」
白梅のずあいぼつきと、折取り給ひ

「朝敵一味のばら、退治の手始めこれ見よ」

と、枝にて丁ど打給へば、平馬が首は飛梅の、ずあいも花の乱れ焼き、誠の劔も及びなき、梅の名

作御手の内、親子は恐るゝばかりなり

「ヤア汝ら。かゝる大事を聞くからは片時も早く都に上り、時平が工み奏聞せよ。我は、見上るこの高山絶頂に三日三夜、立行荒行根気を砕き、梵天、帝釈、閻羅王、三天王に誓ひを立て、魂魄雲井に鳴る。十六万八千の首領となつて眷属引連れ都に上り、謀叛の奴ばら引裂き捨てん。現世の対面これまでなり、いそふれやつ」

と御声も、共に烈しき、吹き立て／＼本堂の、甍破れて方丈、葎遣戸は木の葉の如く、庭の立木も飛梅も、花もも吹ききる。親子も住持も大きに驚き

「期も来らざる御身を捨て、天帝へ祈誓あり。御本意は達するとも、御台、姫君、若君の御嘆きはいかばかり。留まり給へ」

と御袖に、取り付く梅王白太夫、弓手馬手へ匆ね

飛ばし

「住僧いたくな留め給ひそ。早や天帝の恵みによつて、形はこのまゝ鳴神の、不思議を見せん」と散り残る、梅花を取つて口に含み、天に向つて白梅花、渦巻く火焰となつて、雲井遥かに行末は、怪し恐ろし

寺入りの段

一字千金二千金、三千世界の宝ぞと、教へる人に習ふ子の中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、労はり傳かじつきわが子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所がへ。子供集めて読み書きの器用不器用清書きを、顔に書く子と手に書くと人形書く子は頭かく、教へる人は取分けて世話をかくとぞ見へにける。中に年かさ吾作が息子

「コレ皆これ見や。お師匠さんの留守の間に、手習ひするは大きな損。おりや坊主頭の清書きした」

と、見せるは十五のよだれくり、若君はおとなしく

「一日に一字学べば、三百六十字との教へ。そんな事書かずとも、本の清書きしたがよい」

と八つになる子に呵られて

「エ、ませよ、ませよ」

と指差して、誂ちようけ戯かゝるを、残りの子供

「兄弟子に口過いごすよだれくりめを歪いめてやろ」

と、手ん手に卦算けさん振り廻す、自然天然肩持つも、伝はる筆の威徳かや。主の女房奥より立出で

「またこりや例の諍ひか、おとましましや。今日に限つて連合ひの源藏殿、振舞ひに往てなれば戻りも知れぬ。ほんに／＼こなた衆で一時の間も待ち兼ねる。今日は取分け寺入りもある筈。昼からは休ます程に、皆精出して、習ふた／＼」

「ソリヤまた嬉しや休みぢや」

と、筆より先に読み声高く

「いろはに」

「この中は御人下され」

「一筆啓上、候べく」

の、男が肩に堺重、文庫机を担はせて、利発らしき女房の、七つばかりな子を連れて

「頼みませふ」

と言ひ入るゝ、内にもそれとはや悟り

「こちらへお這入り遊ばせ」

と、言ふもしとやか

「アイ」

「アイ」

と、愛に愛持つ女子同士、来た女房はなほ笑顔

「私事は、この村はづれに軽ふ暮してをる者でござ

ります。この腕白者をお世話なされて下さりよか

と、お尋ね申しにおこしましたれば、『おこせ、世

話してやる』と結構なお詞に甘へ、早速連れて参じ

ました。内方にも御子息様がござりますげなが、ど

のお子でござりますぞ」

「アイ、これが源藏殿の跡取りでござります」

「これは／＼よいお子様や。ほかにも大勢の子達、

いかいお世話でござりますよ」

「アイ、御推量なされて下さりませ。シテ寺入りは、

このお子でござりますか、名は何と申します」

「アイ、小太郎と申しまして、腕白者でござります」

「イヤ。イヤ気高いよいお子や。折悪ふ今日は連合

ひ源藏も、振舞ひに参られました」

「これはマア、お留守かいな」

「お待ち遠なら、私が呼びに参りました」

「イエ／＼、幸ひ私も参つて来る所があれば、その

うちにはお帰りでござりませふ。これ三助、その持

つて来た物、あなたの傍へ上げませ」

「アツ」と答へて堺重、^へ櫃に乗せたる一包み、内儀

の傍へ差出だす

「これはマア、言はれぬ事を」

「イヤ、おはもじながらこの子が参つた印。この塚重は子達への土産、取り弘めて下さりませ」

と、言はねど知れし蒸物煮しめ、わが子に世話を焼豆腐、粒椎茸の入れたるは、奔走子ほんそうことこそ見へにけれ

「これはマア何から何まで、取揃へて御念の入つたこと。戻られたら見せませふ」

「イヤモ、ほんの心ばかり。よろしうお頼み申し上げます。コレ小太郎、ちよつと隣村まで往て来る程に、おとなしうして待つてゐや。悪あがきせまいぞ。

御内証様、往て参じましょ」

と表へ出づれば

「かゝ様、わしも行きたい」

と縫り付くを振り放し

「嗜めよ。大きな形なりして後追ふのか。御覧じませ、

まだ頑是がござりませぬ」

「ソリヤ道理いな。ドリヤ、小母おぼがよい物やりましょ。つゐ戻つてやらんせ」

と目で知らすれば

「アイ、ついちよつと一走り」

と、後追ふ子にも引かざるゝ、振返り見返りて、下

部

寺子屋の段

引連れ、急ぎ行く

「どりや、こちの子と近付きに」

と若君の傍へ寄せ、機嫌紛らす折からに。立ち帰る
主の源蔵、常に変りて色蒼さめ、うち入り悪く子供
を見廻し

「エ、氏より育ちといふに、繁華の地と違ひ、いづ
れを見ても山家育ち。世話甲斐もなき、役に立たず」

と思ひあげげに見へければ、心ならず女房立寄り
「何時にない顔色も悪し。振舞ひの酒機嫌かは知ら
ぬが、山家育ちは知れてある子供、憎体口は聞へも
にくくいぐち

悪い。殊に今日は約束の子が寺入り、母御が連れて
見へました。悪い人と思ふも気の毒、機嫌直して逢
ふてやつて下され」

と小太郎連れて引合せど、さし俯いて思案の体、い
たいけに手をつかへ

「お師匠様、今から頼み上げます」

と言ふに、思はずふり仰のき、きつと見るより暫く
は、打守りみたりしが。忽ち面色やはらぎ

「テさて器量勝れて、気高い生れつき。公家高家の
御子息といふても、恐らく恥しからず。テさてそな
たは、マ、よい子ぢやなう」

と機嫌直れば女房も

「なんとよい子、よい弟子でござんしよがナ」

「よいとも／＼上々吉。シテ、その連れて来たお袋
はいづくに」

「サア、お前の留守ならその間に、隣村まで往て来
と言ふて」

「ム、ムそれもよし、よし、大極上。まづ子供と

奥へやり、機嫌よう遊ばし召され」

「それ皆お隙が出た、小太郎ともに奥へく」

と若君諸共誘はせ、後先見廻し夫に向ひ

「最初の顔色は常ならぬ気相。合点の行かぬと思ふたところに、今またあの子を見て、打つて変へての機嫌顔。なほもつて合点行かず、どふやら様子がありそふな、氣遣ひな聞かして」

と問へば源蔵

もてなし

「ホ、ウ氣遣ひな筈。今日、村の饗応と偽り、某を庄屋の方へ呼びつけ、時平が家来春藤玄蕃、今一人は菅丞相の御恩を着ながら時平に従ふ松王丸。ヤこいつ、病み^{ほう}耄けながら検分の役と見へ、数百人にて追つ取巻き、『汝が方に菅丞相の一子菅秀才、わが子として匿ふ由、訴人あつて明白。急ぎ首討つて出だすや否や、たゞし踏込み受取らふや、返答いかに

と』と退引きならぬ手詰。是非に及ばず、首討つて

渡さふと請合ふた、サ心は、数多ある寺子のうち、

いづれなりとも身代りと思ふて帰る道すがら、あれ

かこれかと指折つても、玉簾たまだれの内の御誕生と、薦垂こもだれ

の中で育つたとは、似ても似付かず。ハ、所詮御運

の末なるか、痛はしや浅ましやと、屠所としよの歩みで帰

りしが、天道のひかへ強きにや。あの寺入りの子を

見れば、満更鳥を驚ともいはれぬ器量。一旦身代り

で欺きこの場さへ遁れたらば、すぐに河内へお供す

る思案。今暫くが、大事の場所」

と語れば、女房

「待たんせや。その松王といふ奴は、三つ子のうち

の悪者。若君の顔はよふ見知つてゐるぞへ」

「サ、そこが一かばちか。生き顔と死に顔は相好の

変はるもの。面差し似たる小太郎が首、よもや贖、

とは思ふまじ。よしまたそれと頭はれたらば松王めを真二つ。残る奴輩切つて捨て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供と胸を据ゑた、が一つの難儀。今にも小太郎が母親、迎ひに来たらば何とせん。この儀に当惑さし当つたはこの難儀」

「イヤ、その事は氣遣ひあるな。女子同士の口先で、ちよつぽくさ欺して見よ」

「イヤその手では行くまい。大事は小事より頭はるゝ。ことによつたら、母諸共」

「エ、」

「コリヤ若君には替へられぬ。お主のためを弁へよ」と言ふに、胸据ゑ

「オ、そふでござんす。氣弱ふては仕損ぜん」

「鬼になつて」

と夫婦は突立ち、互ひに顔を見合はせて

「弟子子といへばわが子も同然」

「サア、今日に限つて寺入りしたは、あの子が業か、母御の因果か」

「報ひはこちが火の車」

「追付け廻つて、来ませふ」

と妻が嘆けば、夫も目をすり

「せまじきものは宮仕へ」

と、共に涙にくれぬたる。かゝるところへ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕籠乗物、門口に昇き据ゆれば。後には大勢村の者、付き従ふて

「ハイ」

「ハイ」

「ハイ」

「ハイ」

「ハイ」

「申し上げます。皆これにをる者の子供が、手習ひに参つてをります。もし取違へ首討たれては、ヤモ取り返しがりませぬ」

「ハイ~~~~~どぞお戻し下され」

と願へば、玄蕃

「ヤアかましい蠅虫めら。うぬらが餓鬼の事まで身どもが知つたことか。勝手次第に連れ失せふ」

と叱り付くれば、松王丸

「ヤレお待ちなされ、暫く」

と駕籠より出づるも刀を杖

「憚りながら、彼等とても油断はならぬ。病中ながら拙者が検分の役勤むるも、ほかに菅秀才の顔見知りし者なき故。今日の役目仕終すれば、病身の願ひ御暇下さるべしと、ありがたき御意の趣き、おろそかには致されず。菅丞相の所縁ゆかりの者、この村に置

くからは、百姓共もぐるになつて、銘々が伴に仕立て、助けて帰る、サ手もあること。コリヤヤイ百姓めら、ざは〜と抜かさずとも、一人づゝ呼出だせ。面改めて戻してくりよ」

と、退引きさせぬ釘鍔くぎかすがい、打てば響けの内には夫婦、兼ねて覚悟も今更に、胸轟かすばかりなり。表はそれとも白髪ちよまの親仁、門口より声高に

「長松よ〜」

と呼出せば

「オツ」

と答へて出てくるは、腕白顔に墨べつたり、似ても似つかぬ雪と墨

「これではない」

と赦しやる

「岩松いわまはぬか」

と呼ぶ声に

「祖父さん何ぢや」

とはしごくで、出て来る子供の頑是なき、顔は丸顔

木みしり茄子なすび

「詮議に及ばぬ連れ失せう」

と、睨みつけられ

「オ、恐や。嫁にも喰はさぬこの孫を、命の花落ち

遁れし」

と祖父が抱へて走り行く。次は十五のよだれくり

「ぼんよ、ぼんよ」

と親仁が手招き

「とよよ、おりやもこゝから抱かれて去の」

と、甘へる顔は馬顔で、声きりぎりす

「オ、泣くな。抱いてやらふ」

と干鮭からぎしを、猫なで親が喰はへ行く

「私が倅は器量よし。お見違へ下さるな」

と断り言ふて呼出だすは色白々と瓜実顔

「ヤ、こいつ胡乱うらん」

と引つとらへ、見れば首筋まつ黒々、墨かあざかは

知らねども

「こいつでない」

と突放す。その他、山家やまが奥在所の子供残らず呼び出

して、見せてもく似ぬこそ道理、土が産ました量

り芋、子ばかりよつて立帰る。『スハ身の上』と源

蔵も、妻の戸浪も胸を据ゑ、待つ間ほどなく入り来

る兩人

「ヤア源蔵、この玄蕃が目の前で討つて渡そと請合

ふた菅秀才が首、サア受取らふ、早く渡せ」

と、手詰の催促、ちつとも臆せず

「仮初かりそめならぬ右大臣の若君、搔き首捻ぢ首にも致さ

れず。暫くは御用捨」

と立上るを、松王丸

「ヤアその手は喰はぬ。暫しの用捨と隙取らせ、逃げ仕度致してもナ、裏道には数百人を付け置き、蟻の這ひ出づる、サ所もない。生き顔と死に顔は相好が変はるなどと、身代はりの贗首、それもたべぬ。古手な事して後悔すな」

と言はれてぐつとせき上げ

「ヤア要らざる馬鹿念。病み呆けた汝が眼玉がでんぐり返り、逆様眼まなこで見様はしらず、紛れもなき菅秀才の首、追付け見せう」

「ヲ、その舌の根の乾かぬ内に、早く討て」

「疾く切れ」

と玄蕃が権柄。『ハツ』とばかりに源蔵は、胸を据ゑてぞ入りにける。傍に聞きある女房は『こゝぞ大

事』と心も空、検使は四方八方に眼を配る中にも松王、机文庫の数を見廻し

「ヤア合点のゆかぬ。先達て去んだ餓鬼らは以上八人。机の数が一脚多い。その倅はどこにをるぞ」

と見咎められて、戸浪は『ハツ』と

「イヤこりや今日初めて寺、イヤアノ、寺参りした子がござんす」

「何、馬鹿な」

「オ、それく、これがすなはち菅秀才のお机文庫」と、木地を隠した塗机、ざつと捌ひて言ひ抜ける

「何にもせよ隙取らずが油断の元」

と、玄蕃諸共突つ立ち上る。こなたは手詰命の瀬戸際、奥には『ぼつたり』首討つ音、『はつ』と女房胸を抱き、踏込む足もけしとむ内。武部源蔵白台に、首桶載せてしづく出で、目通りにさし置き

「是非に及ばず。菅秀才の御首、討ち奉る。いはゞ
大切な御首、性根を据ゑて、サ松王丸、しつかり
と、検分せよ」

と、忍びの鏢元くつろげて、『虚と言はゞ切り付
けん、実と言はゞ助けん』と堅唾かたずを呑んで控へある
「ムハ、ハ、ハ、ハ、なんのこれしきに性根所か
ハ、ハ、ハ、ハ。今浄玻璃の鏡にかけ、鉄札か金札か地
獄極楽の境。家来衆、源蔵夫婦を取巻き召され」

『畏まつた』と捕手の人数十手振つて立ちかゝる、
女房戸浪も身を堅め、夫はもとより一生懸命

「サア実検せよ、検分」

と、言ふ一言も命がけ、後は捕手、向うは曲者、玄
蕃は始終眼を配り、『こゝぞ絶体絶命』と思ふ内、
はや首桶引寄せ、蓋引明けた首は小太郎、『贖と言
ふたら一討ち』と早や抜きかける。戸浪は祈願、『天

道様、仏神様、憐み給へ』と女の念力、眼力光らす
松王が、ためつすがめつ、窺ひ見て

「ム、コリヤ、菅秀才の首討つたは、紛ひなし、相
違なし」

と言ふに、びつくり源蔵夫婦、あたりきよる／＼見
合はせり。検使の玄蕃は検分の、言葉証拠に

「出かした／＼よく討つた。褒美には匿しへいふた科赦し
てくれる。イザ松王丸、片時も早く時平公へお目に
かけん」

「如何様、隙どつてはお咎めも如何。拙者はこれよ
りお暇給はり、病氣保養致したし」

「オ、サ、役目は済んだ、勝手にせよ」

と首受取り、玄蕃は館へ、松王は、駕籠にゆられて、
立ち帰る

夫婦は門の戸びつしやり閉め、物をも得言はず青息吐息、五色の息を一時に、『ほつ』と、吹き出すばかりなり。胸なでおろし源蔵は、天を押し地を押し

「ハア、ありがたや忝なや。凡人ならぬわが君の御聖徳が顕はれて松王めが眼がかすみ、若君と見定めて帰つたは、天成不思議のなすところ。御寿命は万々年、悦べ女房」

「イヤもふく大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが目の玉へ、菅丞相様が這入つてござつたか、たゞし首が黄金仏ではなかつたか。似たといふても瓦と黄金、宝の華の御運開きと、あんまり嬉しうて涙がこぼれる。ア、ありがたや尊や」と、悦び勇む折からに。小太郎が母いきせきと、迎

ひと見へて門の戸叩き

「寺入りの子の母でござんす。今漸々帰りました」と言ふ声聞くよりまたびつくり

「一つ遁れてまた一つ、こりやマア何とどふせふ」と、妻が騒げど夫は胴据たうぢよ

「コリヤ、最前言ふたはこゝの事。若君にはかへられぬ。エ、狼狽者うろたえめ」

と戸浪を引退け、門の戸ぐはらりと引開くれば、女は会釈し

「これはマアく御師匠様でござりますか。悪さをお頼み申します。どこにゐやるぞお邪魔であるに」と言ふを幸ひ

「ア、イヤ、奥に、子供と遊んでゐます。連れ立つて帰られよ」

と、真顔で言へば

「ム、そんなら連れて帰りましょ」

と、ずつと通るを後より、たゞ一討と切り付くる、女もしれ者引つぱづし逃げてても逃がさぬ源蔵が、刃

鋭どに切り付くるをわが子の文庫ではつしと受け止め

「コレ、待つた、待たんせコリヤどふぢや」

と、刎ねる刃も用捨なくまた切り付くる文庫は二つ、中よりばらりと経帷子きんすい、『南無阿弥陀仏』の六字の幡、頭はれ出でしは

「コハいか」

と、不思議の思ひに剣もなまり、すゝみ兼ねてぞ見へにける。小太郎が母涙ながら

「若君、菅秀才のお身代り、お役に立てゝ下さつたか、まだか様子が聞きたい」

と、言ふにびつくり

「シテ／＼それは、得心か」

「サア、得心なりやこそこの経帷子、六字の幡」

「ム、シテ其元は何人の御内証」

と、尋ぬるうちに門口より

「梅は飛び桜は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悦べ、悴はお役に、立つたぞ」

と、聞くより『わつ』とせき上げて、前後不覚に取り乱す

「ヤア未練者め」

と叱り付け、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は二度びつくり、『夢か現か夫婦か』と呆れて、言葉もなかりしが。武部源蔵威儀を正し

「一礼はまづ後のこと。これまで敵と思ひし松王、打つて変つた所存は如何に。いぶかしさよ」

と尋ぬれば、

「才、御不審尤も。存知の通り我々兄弟三人は、

銘々に別れて奉公。情けなやこの松王は時平公に従ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩受けたる丞相様へ敵対。主命とはいひながら、皆これこの身の因果。何とぞ主従の縁切らんと、作病さくびょうかまへ暇の願ひ。『菅秀才の首見たらば暇やらん』と今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい、なれども、身代りに立つべき一子いっしなくばいかゞせん。こゝぞ御恩を報ずる時と、女房千代と言ひ合はせ、二人が中の倅をば先へ廻してこの身代り。机の数を改めしも、わが子は来たか、と心の著め。菅丞相にはわが性根を見込み給ひ、『何とて松のつれなからふぞ』との御歌を、『松はつれない、つれない』と世上の口に、かゝる悔しき。推量あれ源蔵殿、悴がなくなば何時までも、人でなしと言はれんに、持つべきものは子なるぞや」

と、言ふに女房なほせき上げ

「草葉の陰で小太郎が、聞いて嬉しう思ひませふ。持つべきものは子なるとは、あの子がためによい手向け。思へば最前別れた時、何時にない後追ふたを、叱つた時の、その悲しき。冥途の旅へ寺入りと、早や虫が知らせたか、隣村へ行くと言ふて道まで往んで見たれどもナ、子を殺さしにおこして置いて、どふマア内へ、どふマア内へ、去なるゝものぞいの。死に顔なりとも今一度見たさに、未練と笑ふて下さんすな。包みし祝儀はあの子が香典、四十九日の蒸物まで持つて寺入りさすといふ、悲しい事が世にあらふか。育ちも生れも賤しくば殺す心もあるまいに、死ぬる子は媚みめよしと美しう生れたが、可愛やその身の不仕合せ。何の因果に庖瘡まで仕舞ふた事ぢや」と、せき上げて、かつぱと伏して泣きければ、俱に

悲しむ戸浪は立ち寄り

「最後にナ、連れ合ひの身がはりと思ひ付いた傍へ
行て、『お師匠様、今から頼み上げます』と、云ふ
た時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が砕ける。
親御の身ではお道理」

と涙添ゆれば

「イヤこれ御内証。コリヤ、女房も何でほへる。覺
悟した御身代り、内で存分ほへたでないか。御夫婦
の手前もあるわい。イヤナニ源蔵殿、申し付けては
おこしたれども、定めて最期の節、未練な死を、致
したのでござらふ」

「ア、イヤ、若君菅秀才の御身代りと言ひ聞かした
れば、潔ふ首さしのべ」

「アノ、逃げ隠れも、致さずに、ナ」

「につこりと、笑ふて」

「ハ、、、。ハ、、、。ハ、、、ハ、、、ム、、、ア、ア
ハ、、、。出かしをりました。利口な奴、立派な
奴、健気な八つや九つで、親に代つて恩送り。お役
に立つは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出だすは
桜丸、御恩も送らず先立ちし、さぞや草葉の蔭より
も、うらやましかろ、けなりかる。悴が事を思ふに
つけ、思ひ出さるゝ出さるゝ」

と、さすが同腹どうふぐどうしゅう同性を、忘れ兼ねたる悲嘆の涙

「ノウその伯父御に小太郎が、逢ひますはいの」

と取り付いて、『わつ』とばかりに、泣き沈む。嘆
きも洩れて菅秀才、一間の内より立ち出で給ひ

「われに代はると知るならばこの悲しみはさすま
いに、可愛の者や」

と御袖を絞り給へば、夫婦は『はつ』と、共に浸す
る有難涙

「ついでながら若君様へ御土産」

と松王突立ち

「申し付けた用意の乗物、早く〜」

と呼ばはるにぞ、『ハツ』と答へて家来共、御目通りに昇き据ゆる

「はや御出で」

と戸を開けば菅丞相の御台所

「ノウ母様か」

「わが子か」

と御親子ごしんし不思議の御対面。源藏夫婦横手を打ち

「方々と御行衛尋ねしに、いづくにか御座なされし」

「サレバサレバ、北嵯峨の御隠れ家、時平の家来が聞き出だし召し捕りに向かふと聞き、某山伏の姿となり危ういところ奪ひ取ったり。急ぎ河内の国へ御供なされ、姫君にも御対面。コリヤコリヤ女房、小

太郎が死骸、あの乗物へ移し入れ、野辺の送り當ま

ん」

「アイ」

と返事その内に、戸浪が心得抱いて来る、死骸を網代あじろの乗物へ、乗せて夫婦が上着を取れば、哀れや内より覚悟の用意、下に白無垢麻袴。心を察して源

藏夫婦

「野辺の送りに親の身で子を送る法はなし。我々夫

婦が代はらん」

と立寄れば松王丸

「アイヤ〜、これはわが子にあらず。菅秀才の亡

骸を御供申す。いづれもは門火々々」

と門火を、頼み頼まるゝ。御台若君諸共に、しやくり上げたる御涙、冥途の旅へ寺入りの、師匠は弥陀仏釈迦牟尼仏、六道能化の弟子になり、賽の川原で

砂手本。いろは書く子をあへなくも、散りぬる命、
是非もなや。明日の夜誰か添乳せん。らむ憂る目見
る親心、劍と死出のやまけ越え、あさき夢見し心地
して、あとは門火に酔ひもせず、京は故郷と立別れ、
鳥辺野指して連れ帰る

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。